

SHISEIDO GALLERY

ギャラリートーク

「Power Stationについて」

ナビゲーター／シムリン・ギル 日時／2004年10月5日(火) 17:00～18:00

会場／資生堂ギャラリー

司会(河野) 皆さま、本日は雨の中お集まりいただきありがとうございます。今日のご案内のとおり、資生堂ギャラリーでの展覧会開催に合わせたギャラリートークにアーティストのシムリン・ギルさんにご登場いただきます。シムリンさんは、じっくり、ゆっくりとしたペースでいろいろな作品をつくられてきています。またさまざまな都市で作品を発表されていて、ちょうど先週始まりましたサンパウロビエンナーレでも作品を展示されています。東京での個展は今回が初めてとなりますので、彼女の作品を待ちわびていた方もいらっしゃるかと思います。

簡単にご紹介しますと、シムリンさんはマレーシアのアーティストで今、オーストラリアのシドニーに住んでいらっしゃいます。今回は、資生堂ギャラリーのために新しい作品をつくっていただきました。彼女の出身地マレーシアにあるポートディクソンという小さな沿岸の町がその題材となっています。その町で撮った写真と、そこにある海岸で拾ったこまごまとしたものをギャラリーの床に置くという、写真とオブジェの両方から成る作品となっています。

我々は今、東京の中心とも言えるこの銀座のギャラリーにいるわけですが、ここにいる私たちにとって、この遥か遠くにあるマレーシアの小さな町の写真がどういう意味を持つのか、我々はそこから何を読み取ればいいのか、といったことをシムリンさんのお話を通して一緒に考えていければと思います。

では、ご紹介させていただきます。アーティストのシムリン・ギルさんです。拍手でお迎えいただければと思います。(拍手)今日は、通訳の横田佳世子さんにお手伝いいただきます。よろしくお願いいたします。(拍手)

では、まずは写真についてお話いただけますでしょうか。ギル 先ほど、実は河野さんとお話をしていたのですが、今までの私の作品がまったく紹介されていない、私のことをご存知の方がほとんどいらっしゃらないところで自分自身の作品を紹介する機会に恵まれるのは、なかなかおもしろいことではないかとも思っています。ですので、まず最初に、こういった作品がどうやって生まれてきたのか、その成り立ち、そして今までのいきさつについて簡単に紹介したいと思います。

この作品ですけれども、私の左手にあります白黒の写真、これはある家の内部を写したのになります。そして、右手に写っていますこちらのカラーの写真、これはある発電所の中を写しています。この発電所と普通の家、これらは実は同じところにありまして、塀をひとつ挟んで40年以上の間、ご近所として、いわゆるお隣さんとして一緒に暮らしてきたものなのです。そして、このお隣さん同士のこの家と発電所は、マラッカ海峡を見下ろすマ

レーシアのある小さな町の同じ海岸線の同じ浜辺を分け合って、今もなお、一緒に暮らしています。

初めてこのお話をいただいたとき—8カ月か9カ月ほど前ですけれども、こういった展覧会をするために新しい作品をつくらないかということで、資生堂さんからお声をかけていただきました。



Power Station 2004 © Simryn Gill

ちょうどそのときに私は、この発電所が解体されるということを知ったばかりでした。この発電所は火力発電で石油を使っているものですが、40年以上も稼働してきたものの、やはり今の時代に照らし合わせて、大気汚染に対しての問題があるのではないかということになり、こういった古い技術はもはや廃れている。だから、ここはもう廃止し、解体すべきだといった時代の必然的な流れがあるわけです。

もうひとつのこの家ですけれども、実はこれは私の実家です。



Power Station 2004 © Simryn Gill

私はここで育ちましたけれども、今この家にはかなり年をとった両親が2人だけで暮らしています。そういうふうにならぬ両親をずっとこの家に置くのもどうかということで、兄弟とも

いろいろと相談をするため実家に里帰りしているときに、ちょうどこの発電所の話も知ったわけです。

このようなお話をしていく中で、やはりこの作品を生み出してきた背景には、アートということよりも生きるということ、そしてまた、命ということについて私が考えてきたことがあるのではないかという思いがあります。といいますのも、この発電所も、この両親がずっと大事にしてきたこの家も、どちらももはや今の時代のものとは異なっている古きものだということがいえるからです。

ちょうどそのとき、私は2つの大がかりな写真シリーズを完成させたばかりでして、その写真シリーズでは国(ネーション)というものの中へと目を向けていました。国というのは、この場合には本当にふるさととしての国という意味なのですが、そういった公のもの、みんなが共有するものの中にも、プライベートなもの、つまり「心の中」というものが果たして見えるのかどうかということについて考えていました。それでマレーシアの家を260軒、これはもう本当にいきなり飛び込みで訪問し、家の中の写真を撮らせてもらったのです。そうしたさまざま写真で構成したシリーズ「ダラム(内部)」をつくったわけです。



Dalam 2001 (detail) © Simryn Gill

そういうふうに友達の助けを借りながら、国中を横断していきながらつくっていったものが完成したばかりで、そういう中で非常にこう、何かの「内部」あるいは「中」といった、普通には見えてこないようなものを写し出すような写真作品を完成させた感じがあったのです。そして、そのときにちょうどこの発電所が解体されるということも知った。さらには、こういった展覧会のお話もいただいたということが、全部同じときに重なったわけです。

作品をつくるということのその理由や動機、そして、どこでそれを展示するのかということがすべて直接的に結びつくことはそう毎回あることではありません。ただし、今回の場合には、さらにとてもおもしろいことがひとつありまして、東京のこの場所で展示するという、そして、この作品が生まれてきた背景との間には、実は普通とは異なりまして、かなり結びつきがあるといえるのです。この発電所は、そもそもは1960年代にイギリスからの資本提供と、フランス、インドの技術を導入し、石油を使った火力発電所としてつくられました。それが解体されるということを申しましたけれども、新しく今度はガスを燃料とする発電所として生まれ変わって、それに使う技術は日本の技術、そのための建設費用も日本からの円借款が提供されるということがわかりました。

実家に里帰りしていたときなのですけれども、10年ほど前に他界した祖父のいろいろ残した資料が出てきて、あちらの小展示室に海から拾ったものが散りばめてあるのをご覧いただけ

ばお分かりになると思いますが、孫たちの中でも考古学者の気があったのは私ぐらいのものでしたのですけれども(笑)、そういった古い、祖父が残した資料をいろいろとひっくり返していましたら、1940年代、ちょうどマレーシアが日本軍の占領下に置かれていた時代のことをいろいろと書き残していたこともわかりました。そのときに、このふるさとの町の様子はどうであったのかということなどがいろいろと出てきたので、そこであからさまではないようなやり方で、何とかして、普段は表に見えていないような、そういった「中」のことが見えるような作品づくりができないかということ考えたわけです。

もうひとつ、この作品をつくることになりまして、到底答えを見出すことができない問題、すなわちカメラはどこまで中をのぞき込むことができるのか、そういう隠されたものを明らかにすることができるのかという問題にも取り組んでいきたいと思いました。

そこで思ったのは、こういった2つの記録をつくり、これを並列して見せることによって、その比較を通じて浮かび上がってくるものがあり得るのではないかということだったのです。

司会 今、いろいろと建物そのものについてお話しいただいたのですけれども、物の内部に入っていき、見入るということ、それから、比較で物を見ていくということをお話しいただきました。

今、皆さまは少し離れたところからご覧いただいているので、なおさらだと思うのですけれども、多分ディテールが皆さんのいらっしゃる場所ではわからないと思います。すごく小さい写真という印象を受けられる方もいらっしゃると思います。これはもちろんアーティストの意図したことなので、そのことについても少しお話しいただければと思います。



ギル それも非常におもしろい点をご指摘いただいたと思います。やはり作家として、特に写真という表現手段を使っていると、こういった大きさ、こういったスケールを選ぶのかということとは無限に可能性があるわけです。そういう中でどうやって決めていくのかということをご質問いただきましたが、私自身の思うところ、大がかりな写真よりも実はこういった小さい写真の方が、はるかにこういった細かいことをいろいろとたくさん見せてくれるのではないかと、また、人を引き込んでくれるのではないかと考えています。

そういう写真そのものに関係する点がひとつと、もうひとつは隣の小展示室にあるさまざまなオブジェや物体、そういったものとの間の関係性を持たせていながら、こちらの写真作品そのものの自体の存在を確立させていくという両方のことをねらいました。その結果たどり着いたのがこのスケールだったのです。

この写真の展示の仕方そのものなのですが、先ほど言いましたように、これは比較を前提にしたものです。それぞれのイメージをお互いに呼応させながら、その関連性を見ていただきたいということを考えたのですが、その可能性をいろいろと探っていったら、これしかあり得ないのではないかと、そういう一つの考え方が出てきました。

これは、ちょうどこの2つの壁面の境目を前にして立ってご覧いただきますと一番わかりやすいのですが、そっくり同じ配置をこの右と左で再現させています。ちょうど本のページを開いて、それを直角に立たせたような感じというふうにご覧いただければわかりやすいかと思います。そういうふうにしてパターンと閉じればぴった



司会 じっくりと見ていくとさまざまな類似性が浮かび上がってきますね。では、作品タイトルについてお話しいただけますか。
ギル そうですね。「パワーステーション」という名前をこの作品につけました。それは、ひとつには発電所という意味があります。そういった力、そういったエネルギーを生み出す場所を撮っているからです。ただ、それだけではなく、この力というのは、例えば感情の爆発、さまざまな人間関係ということでも読み取ることができますので、そういうふう読み解いていきますと、こういった一家がずっと育ってきた、そしてまた暮らしてきた家というの、また別のパワーステーションだということが言えるかと思えます。

さらに展開させて考えていきますと、自然そのものがそういった大きな力、そういった大きなエネルギーなどというものを凝縮させ、それをさらに高めて爆発させていっている、そういった存在ではないかということも考えます。

司会 では、ここで写真とオブジェが「パワーステーション」という言葉でつながりましたが、多分皆さまの中には何で発電所の写真はカラーで、家の写真は白黒なんだろうと思われた方がいらっしゃると思います。最後にその点について聞いてみたいと思います。
ギル 私は今までに純粋に白黒だけを使ったり、あとは、カラーを使ってちょっとドキュメンタリー風に味つけをしたりするという作品づくりをしてきましたけれども、今回初めてひとつの作品の中で、カラーと白黒というのを合体させています。

今回のこの白黒とカラーの選び方ですけれども、まず、家というのは非常に中にこもっている、そういった本当にごく親しい親密な空間でもありますし、また、過去を振り返るといふノスタルジックな要素もあります。私がねらっていたのは、うまくいったかどうかわかりませんが、白黒をあえて使うことによって、この家の中の空間をもっと抽象的なものにするのができるのではないかと、白黒を使うことによって、見る人との間の距離を意識的に作り出すことができるのではないかと

りと重なるような、そういった位置づけになっています。そういうふうにして比較をすることもこの左右でできる、単独でそれぞれ見ていくこともできる、そういったつくり方になっています。

例えば今示したこちらの方の写真、それとちょうど同じ位置にあるあちらの壁の写真はどれかということ、テレビがあるあの写真になります。あちらにテレビの画面があり、こちらの方はいろいろなパネル、スクリーン、そして椅子があるということで、対になっているように見えます。

特に私がお気に入りなのが、こちらが一番上の方にあるものですが、ここではマスターベッドルームの部屋の対として選んだのは、タービンの一番重要なメインホールになります。



Power Station 2004 © Simryn Gill

と考えました。

一方、このカラーの写真ですけれども、カラーという非常に現代的な今の写真というように皆さんよく思っておられるかと思いますが、実はカラーというのは古くなりやすいので、白黒の写真に比べてカラー写真の方が何年前のものなのかということが、すぐにはっきりわかる場合があるのだということに気づきました。カラーの技術は日進月歩ですし、実際にどんどんと色があせていきますので、そういったところもねらいまして、今回はカラーと白黒を使い分けたわけです。

司会 では、そろそろ小さい展示室の方に進んで、作品のもうひとつの部分を見ていきたいと思えます。

ギル 先ほどの写真作品をつくったときには、私は場所そのものの記録を作成したいと思ったのですが、写真というのは絶対的にして純粋なる真実そのものであるというようにみなされがちだと思います。そこで、できることだったら、その場所の手ざわり、手ごたえそのものを別の形で何とか記録したいと思ったんです。写真ではないやり方で、何か別の形で真実そのものを表現し、それを残すことができるのではないかと考えまして、オブジェを加えることにしたのです。

ポートディクソンという町は、今は人口3万5千人ほど、マラッカ海峡に臨んでいまして、町の前には一連の湾が続いています。ここはいろいろと工業も発達していまして、工場もあれば発電所もある、石油精製所も2つある。いろいろと産業も盛んだし、漁業もある。そして、それだけにぎやかなところにもかかわらず、実は人が住むところとしてもいいところなので住宅地も充実しているんです。

そこで育っていたときには私はよく海岸沿いを散歩していましたが、そうやって歩いていく中で、浜辺に打ち上げられるさまざまな物をずっと目の当たりにし、それがどういうものなのかよく知るようになりました。

ここで作品としてまとめましたのは、いわばそういった海に投げ込まれて、それがずっと水に漂って行って、最終的にまた浜辺に打ち上げられている、そういった物の残された残滓になります。主にこれは、先ほどの家と、そして発電所の真ん前にあります海岸線のあの湾で拾ってきたものですが、それ以外にも、連なっている海岸線、その湾の方から拾ってきた物もいくつか入っています。

私が特に興味を持っているのは、自然が非常に平等にすべての物を扱っているという、そのすさまじさです。例えばここにある物体を見ていただきますと、工業製品もあれば、一般住宅で使われていたような物の名残りも見られます。人工の物もあれば、自然の物もありますけれども、これが砂、そしてまた岩、そういったものと触れ合って、いろいろとすり減っていく中で、だんだんと何がどれなのかということが見分けがつきにくくなってきて、分類そのものが非常に難しくなるものだと気づきました。



©桜井ただひさ

先ほど、この発電所と家が40年くらいの間お隣さんとして一緒に仲よく暮らしてきたということを話しました。最初から関係はうまくいっていたわけではなくて、やはり長年のつき合いで、そういうふうにな所として、お隣さんとして、すっかりお互いになじみになって、ずっと一緒に平和に過ごしてきたわけです。

それが、ちょうどお互いになじんでくるその過程そのもの、英語では「ナチュライズ」と言いますが、自然にお互いになじんでいく、帰化して行って、そして一体となっていくということ、それはこういった海から打ち上げられてきた物にも同じように感じることができるのではないかと思います。

自然が生み出した物、そして、人の手によって生み出された物、そういったものが多々混ざり合って、それがお互いになじんできて、見分けがつかなくなってくるようにそっくりになっていく、ものごとにはそういった過程があります。特に私が興味を持っているのが、そういうお互いに区別ができなくなっていくという過程そのものなのです。もともと自然が生み出したものではないようなガラスやレンガが海辺にあるということは、ごく自然のことだと思っています。

司会 今、「ナチュライゼーション」という言葉をお使いになって、横田さんが「帰化する」と訳してくださいましたが、これは非常に興味深くて、例えばある国籍の人が違う国籍に帰化するというのも「ナチュライズ」という同じ言葉を使うと思うのですが、私の個人的な感想ですが、こういったものを見てみると、もともとは全然違うところから来ている物が、あるひとつの場所ですべて一緒になっている。もともとどこから来たかという

ことが、だんだんわからなくなってくる。そういったことも読み取れるような気がするのですが、いかがでしょうか。



©桜井ただひさ

ギル 今、ご指摘の「ナチュライズ」という言葉自体、非常に政治的な側面があると思います。そういったことに対して私も非常に興味を持っています。今日の状況の中でこの「ナチュライズ」という言葉を使っていきますと、人の移動、移民、そしてまたその受け入れの問題ということなどを私たちは思い浮かべますが、それ以外にもっと複雑で、もっとはるかに深い次元でのさまざまな側面、そういった意味合いがあるのではないかと思います。

そういったいろいろな複雑なものを内包している概念や言葉などに取り組んでいくときには、そういった表面的なことではなく、表にあらわれていない、もっと深く潜んでいるような物事に私なりに取り組んでいきたいし、そういったものにむしろ興味をかき立てられているのだと思います。

「ナチュライズ」という言葉。これは自然な、本来の、そしてまたそのままの素の、といった意味もちろんありますし、また、そういうふうにな化するという意味、そしてまた、お互いになじんでいくという意味、さまざまな考え方を含んでいますが、そういう中でナチュラルな状態、まったく手をつけていない本来の自然な素のままの状態があつて、それがまた別のところにおいて、そしてまたいろいろと変化していく、変わっていくという、そういった次元がまたこの言葉の中から読み取れるのではないかと思います。

うまく表現できないのですが、こういった場所に行きましても、私たちが目の当たりにするその場の状況の中には、必ずいろいろな時代の積み重ね、そういったものが層を成しているのではないかと思います。私がいつも興味をかき立てられてやまないのは何かといえば、そういった目の当たりにするさまざまな事象、さまざまな事象の中で、私たちが本来からそこにあった自然のものだというふうにな思っているものが、実はかなり最近になって外部から持ち込まれている場合が往々にしてあることです。すなわち完全によそから来て、そしてその場に溶け込んで帰化したものを、私たちは自然な一体というふうにとらえてしまっているのではないかと。そういったことに対して私は常に興味を持ってきました。

私たちは、そういった現象自体を常に忘れがちなのですが、写真作品などの中で常につきまってくる問題は、一体どこまで掘り下げて、どこまでさかのぼっていくべきなのか、どこまでを明らかにすべきなのかという問題かと思っています。例えばヒンドウ教の到来はといったら、1000年かその辺までさかのぼることになる。

そういった昔の時代の後に、今度はイギリス人がやってきた、そういった影響というのがある。それだけではなく、やはり私たちがごく当たり前に受けとめている景色の中の木々も、実はよそから持ち込まれていたりもする。そういったことなどについて常に考えていくわけです。

同じようにして、こういった漂着物の作品をご覧くださいと、ガラスはいつかはまた元通りに砂になってしまう。そしてまた、レンガというのもまた元通りの材料へと完全に還元されて、そして泥になってしまう。そういった瞬間までいくかどうか、そういったことなどについても考えています。

司会 シムリンさんはいろいろな作品を以前にもつくられています。少しカタログが小さいのでご覧いただけないかもしれないので、受付の方に置いておきますので、お帰りの際にご覧ください。例えばこういうふういろいろな植物の種や道端で拾ったものなどに、ちょっとかわいいのですけれど、車輪をひとつずつ付けてインスタレーションしたものや、あるいは、シンガポールとかマレーシアの海岸でこのようなガラスの破片を数千と拾われて、そのひとつひとつに英語の言葉を彫りつけてインスタレーションしたものがあつたりします。こういったものと今回の作品や、今日お話いただいたこととの関係性なども少しずつ見えてくると思います。ぜひ皆さんもお帰りの際にご覧いただければと思います。



Roadkill 2000 © Simryn Gill

せっかくなので、もしご質問があればお受けいたします。

質問 これを集められた期間をお聞きしたいです。どのぐらいの間でしたか。

ギル どれくらい前からかわからないのですが、私は実家にはもう住んでいませんので、ずっと自分の荷物の中や靴の空き箱にこういった物をいろいろと詰め込んで、それを持って回っていました。ですので、最初にいつごろから始めたのかというのは、もう覚えていないぐらいの大昔ということになります。でもこの作品をつくるにあたり、写真の方を撮影していて、オブジェの方を考えたときに、今持っている量では、とてもではないけれど自分が思っているような作品はつくれないということに気づき、まだ実家の近くに住んでいる漁師の友人の息子さん、まだ20代なのですが、その人の協力をいただくことにしました。毎週末、その人が海岸沿いでいろいろなものを集めてくれて、その人の6カ月から8カ月の間の毎週末の仕事の成果というところもあります。そういった意味では作品づくりの材料はコラボレーションで得たものですね。

先ほど、ちょっとカタログの中でご覧いただきましたガラス

だけを集めた作品、あのときにはシンガポールに住んでいましたが、かれこれ3年ほどかけてこの材料を集めました。そのときには子供がまだ小さかったものですから、毎週末どこかの海岸で遊んでいて、あれは計3年間で材料を集めています。



Washed Up 1993-1995 © Simryn Gill

司会 ほかに何かご質問があれば。写真の方のことも結構ですが。

質問 シムリンさんにとって、発電所というのは、自分が暮らしていたころから既に隣にあるものという感じだったのですか。発電所は、シムリンさんにとってどういったものですか。

ギル あの発電所ができたとき、私は11歳でした。それができる前には、そこにはマングローブが見事なぐらい生えていまして、いつもいとこと一緒にそこで遊んでいたのですが、発電所ができてそのマングローブがなくなってしまうと知ったときには非常に私たちとしては悲しかった。いろいろと複雑な気持ちを覚えたということは確かだと思います。マングローブだけでも、家の隣にあるということから、野生の味をそのまま味わいながらも子供たちだけでも自由に遊んで構わないという、そういった特別な場所だったからです。

しかし今回、この発電所がなくなることになりました。今年の年末もしくは来年早々にもこれは倒されてしまって、そして解体されるわけですが、取り壊しが決まったと聞いたときに、不思議なものですけれども、何とも言えない、そういった悲しさ、わびしさというのを感じました。それが何とも人間の不可思議なところでもありますし、今、いろいろとお話ししてきた気持ちや、そういった思いの、なんというか非常に妙味のあるところではないかと思っています。

司会 ありがとうございます。もう少しシムリンさんには会場に残っていただきますので、もし何かご質問があれば直接お話を

聞いていただきたいと思ひます。一旦ここで終わらせていただきます。シムリンさんに拍手をお願いいたします。(拍手)それから、通訳の横田さん、ありがとうございました。(拍手)

